監修　佐佐木信綱　新村出　津田左右吉
辻善之助　山田孝雄　和辻哲郎

紫式部日記

玉井幸助校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書
「紫式部日記」　玉井幸助校註
昭和三十年八月三十日初版改裝
印刷所　凸版印刷株式會社
發行所　朝日新聞社（東京都千代田區有樂町・大阪市北區中之島・小倉市砂津・名古屋市廣小路）
定價　二二〇圓

目次

解説……三
一　その時代……三
二　女流文學……三五
三　紫式部……三一
四　紫式部日記……七六
略年表……九四
作者系圖……九七
凡例……九八
本文……一〇一
一　後一條天皇御誕生の記……一〇一
一　秋の土御門殿……一〇一
二　殿の三位頼通……一〇四
三　碁のまけわざ……一〇五
四　讀經あらそひ……一〇六
五　辨の宰相……一〇七
六　菊のわた……一〇八
七　蔦のいろ……一〇九
八　御產所のしつらひ……一一〇
九　修驗祈禱……一一一
一〇　九月十一日御誕生……一一三

一一　人々の服装……一三一
一二　御三日のうぶやしなひ……一三三
一三　御五日のうぶやしなひ……一三四
一四　月夜の舟あそび……一三〇
一五　御七日のうぶやしなひ……一三一
一六　御九日のうぶやしなひ……一三三
一七　宮のおんしと……一三四
一八　中務の宮わたり……一三五
一九　述懐……一三五
二〇　小少將と贈答……一三七
二一　十月十六日行幸……一三八
二二　またのあした……一四七
二三　十一月一日五十日の儀……一四九
二四　御草子つくり……一五五
二五　皇子御成育……一五七
二六　里居……一五七
二七　内裏還啓……一六一
二　還啓以後年末までの記……一六五
二八　五節……一六五
二九　臨時の祭……一七四
三〇　新參の思出……一七六
三一　ひきはき……一七七
三　寛弘六年の記……一八〇
三二　正月三日御戴餅……一八〇
三三　人々のかたち（以下四一まで消息文か）……一八三
三四　人々の心ばせ……一八八
三五　わが身のありさま……一九九
三六　口もちけしきことごとしき人……二〇四
三七　つらき人……二〇五
三八　日本紀の御局……二〇六
三九　樂府進講……二〇七
四〇　求道の思ひ……二〇八
四一　消息文？　の結び……二〇九
四二　御堂まうで……二一一
四三　源氏の物語……二一三
四四　戸をたたく人……二一四

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

四　寛弘七年の記……二一五
四五　宮たちの御戴餅……二一五
四六　中宮の臨時客……二一六
四七　二の宮の御五十日……二一八

紫式部日記

玉井幸助

解　説

一　その時代

紫式部日記の書かれたのは今から約九百年前の遠い昔のことである。九百年前といへば、今のわれらには想像も及ばない變つた世の中であつた。科學の進歩した原子時代の今の世に、薫香の幽かなかをりを鳴く蟲の音とともに愛翫したそのころを知らうとするのは容易でない。著る物も、住む家も、食べるものも、今では見ることのできないものばかりである。一代の榮花を極めたといはれる御堂關白道長ほどの人が――この人の事は、紫式部日記の中に生き生きとゑがかれてゐる――足を挫いて蓮の葉でたでたり、あまづらの汁を甘いものの最高と心得たりしてゐた時代である。道長は、コーヒー一ぱいも飲んでゐない。それでも、この世をばわが世とぞ思ふほど滿足をして死んだ。道長がコーヒーの甘さを知ることができなかつたと同じやうに、われらは道長の時代を知ることができないのだ。もつとも、歴史は過ぎ去つた世を說いてくれるが、未來の記錄は讀ませてくれない。そのゆゑに、道長が今の世を知らなかつたとしても、われらは歴史の說くところによつて、彼の時代を知ることができるともいへるであらう。それは一應その

とほりである。しかし歴史の説くところは概念に過ぎない。われらがもし、九百年前に生きて、その世を自ら體驗したであらうならば、歴史の説くところなどは繪そらごとである。ところが日記は歴史とはちがつて、概念としてではなく、體驗として、その世の姿を、われらの眼前に示してくれる。

紫式部日記は、今から九百年前の一人の女性が、その世の中と、その世に生きたおのれ自らの姿とを、ありのままに記錄しておいたものである。もしそれが、あやまりなく、曇りなく讀みとられたならば、われらはまた九百年前のその時代を——少くともその時代の一面を、われ自ら體驗することができるであらう。ただし、日記をあやまりなく讀みとることは、その時代が遠ければ遠いほど、ますますむつかしいことである。なぜかといへば、日記は説明ではなく、事實そのものであるから。たとへば、地中から掘りだされた銅鐸（どうたく）といふ怪物、あれは事實をそのままわれらに見せてゐるが、われらはこの怪物を解釋することができない。日記は、事實をそのままわれらに示してくれるが、今のわれらは、それの書かれた時代に對する知識を缺いてゐるためにそれを正しく解釋することができないのである。時代は日記の背景である。

紫式部日記の書かれたのは、今から九百年も前のことである。それは、藤原道長の全盛時代のことである。帝都が平安の地に定められてから、既に二百年の歳月が流れてゐた。平安城、すなはち今の京都は日本統一の中心地と固定し、それはまた、皇居を中心として、日本文化の源泉地ともなつてゐた。

桓武天皇が、青垣山めぐる大和の地、千五百年のふるさとをお捨てになつて、四通八達の山城平野に遷

都あそばされたのは、曾祖父天智天皇の御偉業を完成し給ふためであつたと拜察せられる。大化改新の理想は、さらにいへば、その根源である聖德太子の世界觀に立脚する平和國家の建設は、この新しい都によつて實現せられるはずであつた。しかし事實はこれに伴なはなかつた。平安奠都以來ますます榮えて來た藤原氏一門の權勢は、私有財產增殖の弊を再び馴致し、京都に安住して地方に莊園を領する權門勢家や、地方の豪民と結んで私利を營む國司が多くなり、大化改新の理想たる封建打破、四民平等、人材拔擢の目標は、いつの間にか見失はれてしまつた。

新興日本の文化の源泉地として設計せられた平安京の規模は雄大であつた。今その大概を記すと、全市の廣さ、南北一千七百五十三丈(五・二粁餘)、東西一千五百八丈(四・五粁弱)、卽ち南北に長い長方形を劃す。これが平安京の外郭である。その中には、北寄りの中央に大內裏(皇居と諸官省を含む一區劃)があつて南面する。大內裏も京城も、四面に土垣をめぐらし、さらに堀をめぐらす。大內裏の南の正門である朱雀門から、京城の南門なる羅城門まで、南北に通じた大路が朱雀大路で、この大路によつて全市を左京(東の京)と右京(西の京)とに二分する。二京ともに京極(京城の東の極をなす限界線が東京極、西の極をなすのが西京極)と朱雀大路との間に、それと並行する四本の大路、十一本の小路を開く。これによつて、南北に通じる道路が大小合はせて三十二本ある。また東西に通じる道路は、大路が九本、北から一條二條とかぞへて九條で終る。一條と二條の大路は大內裏をはさんでゐて、他の大路よりも間隔が廣く、そ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

の間にまた、やや狹い大路が四筋、その大路の間ごとに更に一筋づつの小路がある。二條から九條までは、各條の間ごとに三筋づつの小路がある。卽ち東西に通じる道路は、大小合はせて三十九本ある。この間を小別けして、民家一戸を長さ十丈幅五丈と定め、八戸をつらねて一行とし、四行をならべて一町とし、四町を合はせて一保とし、四保を一坊とし、左右兩京とも一條の大路に添うて四坊ある。中央の朱雀大路は幅二十八丈。大內裏の南面を東西に通じる二條大路は幅十七丈。その左右に添ふ東西の大宮通りは、いづれも幅十二丈。以下十丈、八丈、小路もなほ四丈の幅を持つてゐた。道に添うて柳櫻を植ゑつらね、都ぞ春の錦なりける美しさ、まことに堂々として大國の皇都たる偉風を備へたものであつた。もしそれ、聖德太子の遠大なる理想、大化改新の新取開明の精神が、この都において復活したであらうならば、日本國民本來の希望、知識を世界に求めて文化の創造に寄與することが出來たのであらう。すなはち、朝鮮を通じ支那を通じて、印度、更に西方諸國の文明を吸收し、科學の研究に對しても力を致し、物心融合の大文化を建設して、平安城の名は、世界の平安に貢獻する名ともなつたのであらう。これこそ平安奠都の大目標であつた。然るに、惜しいかな、平安人士は既に祖先の氣魄を失つてゐた。平安の名は、徒らに貴族の平安を維持し、ただ花鳥風月を吟詠して一時の平安をよそふ消極的なものとなつてしまつた。

日本人には科學的思想がないといふ。果してさうであらうか。堤中納言物語の一篇「蟲めづる姫君」の主人公は、多くの昆蟲を採集して自らこれを飼養し、その成育變化の實情をくはしく研究して、「世の中の

人が、ただ徒らに蝶よ花よといつて、その外面を玩んでゐるのは淺はかなことだ、毛蟲はきたないといふが、その毛蟲が蝶になるのだ。ものはその根源を究めて、變化のさまを知るところに興味があるのだ」といつてゐる。これは物語の中の人物であり、そしてこの物語の作者は、この姫君を變人として笑つてゐるのであるが、これによつて、日本人に科學思想がないのではなく、それを俗として卑しんだために發達しなかつたのだといふことが知られる。科學的態度を俗として卑しむの風は、平安時代貴族の生活が、いよいよこれを高めたのである。彼らは、ことさらに、「田といふもの」「稻といふもの」などいふ言葉を使つて、實生活に關係ある物に對する知識を持つことが恥であるかのやうに考へた。彼らが學問として重んじたのは、漢文を讀むことであり漢詩を作ることであつた。

遠大な理想を以て建設せられた平安の皇都は、既に氣魄を失つた平安人士にとつては、寧ろ大規模に過ぎた。それだから道長のころになると、西の京はもう荒れはてて、築土がくづれ、瓦の落ちた邸宅が枯野の中に點在する有樣となつた。また、朝廷の盛儀が執行せられるところとして堂々たる偉觀を備へてゐた大極殿・八省院は、貞觀の火災に燒けてのち、規模が甚だ小さくなり、それさへ後には、破れるままで省りみられなく、豐樂院の荒廢はあたかも姑蘇臺の如しといはれ、輝中將・光少將の出家の動機が、一つにはそれを嘆いてであつたとまでいはれてゐる。道長は、その豐樂院の鴟尾を取りはづして法成寺の建築に用ゐた。また、國家の政務を執り行ふ太政官の廳は、天井が朽ちて蜈蚣(むかで)を落し、屋根うらに蜂の巢がぶら

さがつてゐた。

外に海外との交渉もなく、内に殖産興業の計畫もない當時の政務は極めて單調、ただ、しきたりのままを年々くりかへしてゐるに過ぎないものであつた。しかしその官職にあるものは、つとめてその職務に權威を與へてその地位を守らなければならない。それ故、内容のない職務に、極めて繁瑣な形式を與へ、その形式が有職故實と呼ばれ、足のふみやう、手のあげやう、著物の著こなしに至るまで、悉くその束縛を受け、かりそめにも先例故實にたがふやうな動作をすると甚だしい批難を受け、それを反駁し得る先例故實を陳述することができないと、それは一生の恥であり、ひいてはわが地位を危くするのである。

かやうなわけであるから、當時の文化人である廷臣たちの學問は、ただ徒らに舊例故實を知ることであつて、眞理を求め知見をひらくといふやうなことは夢にも考へられなかつた。迷信の雲は低く垂れて彼らの頭をおさへつけ、病魔退散の加持祈禱や、立身出世の誦經參籠がその世の中を支配してゐた。小野宮右大臣藤原實資は、世に賢人右府といはれ、思慮の深い人であつたが、(この人のことは紫式部日記には右大將と記され、第二三段に、人よりことなりと評してゐる)しかもその日記である小右記を見ると、

長保元年九月十四日。自二昨酉刻許一心神和亂、身熱辛苦、依レ有二風病疑一、早旦沐浴、今夜居二蓮舫阿闍梨枕上一。令二祈禱一、今日飲食殊不レ受。

十五日。證空覺緣等阿闍梨來。於二枕上一令二祈願一。

十六日。所惱自レ曉頗宜。以二光榮朝臣一令二占勘一、云、求食鬼之所レ致也者、仍今夜令レ行二鬼氣祭。

十八日。令レ打二百寺ノ金鼓一、蓮舫阿闍梨、同法禪師相共日中打了、各五十個寺、闍梨親歩行打、志之甚矣。

このやうに自己の病氣を占なはせ、求食鬼の祟りといはれて鬼氣祭を行ひ、また、京都市内百寺の金鼓を打ち廻らせて平癒の祈願をさせてゐる。この百寺金鼓といふことは當時の習はしと見え、このつぎにも、

萬壽二年七月十九日。夢想靜カナラザルニヨリ東寺ニ諷誦シ、早朝六波羅蜜ノ命增師ヲ呼ビ、明日ヨリ百寺ノ金鼓ヲ打ツベキコトヲ云ヒ付ク。毎日十寺、小供料麥鹽等、之ヲ施與ス。（原漢文）

すなはち祈願の爲に市内の百寺を廻り、その金鼓（わにぐち）を叩かせるのである。前回のは二人の阿闍梨が親しく歩き廻つて一人五十寺づつ、一日に打ち終つた特志の行動であり、次回のは子供等に命じて一日十寺、十日間に行はせ、その料として鹽や麥を施與したとある。

ここに少しく當時の衣食住について記して見よう。まづ衣服について男子のをいへば、その種類に禮服・束帶・布袴・衣冠・直衣・狩衣・水干・直垂の八種がある。

禮服は禮冠をかぶり、大袖衣・小袖衣・裳・表袴・下袴・綬・玉珮・襪・舄を著け、太刀を帶び、笏を持つ姿をいふ。武官の禮服はまた別である。

束帶は官吏の通常禮服兼參朝服である。それは、冠をかぶり、袍・半臂・下襲・袙・單・帷子・小袖・

表袴・大口袴・石帶を著け、襪・履をはき、太刀を帶び、帖紙を懷中し、笏を持つ。

布袴は束帶につぐ服裝で、束帶の表袴・大口袴を省いて、指貫。下袴をはいた姿である。公儀でない大儀にはこの服裝を用ゐたといふ。指貫といふは、裾をくくつた括り袴である。

衣冠は布袴のつぎに位する服裝である。冠をかぶり、袍・袙・單（帷子・小袖を重ねることもある）指貫・下袴を著け、半臂・下襲・石帶を略し、笏は持たない。冬は檜扇、夏は蝙蝠を持つ。太刀はつることもあるが多くはつらない。この服裝は公事の席でなく、尋常の參内に五位以上が用ゐるもので、三位以上になると天皇の御前や小儀にも著用した。

直衣は平常服である。直衣の直は、ただ平常の意とも宿直の意ともいはれる。直衣の形に四種あるが、普通の直衣は、形も地質も、縫腋の袍と少しも變りはない。ただその色目と文樣が、冬は表白臥蝶、裏紫または縹、夏は二藍・三重襷、年齡が加はるに從つて縹・淺黃色となる。直衣には烏帽子をかぶるのが普通であるが、その冠をかぶるのを冠直衣と特稱する。直衣の一種に天皇の御引直衣がある。直衣のたけの長いもので、地質・色目・文樣は普通の直衣と同樣であるが、ただ冬は白綾小葵の御文樣である。そして天皇は常に冠を召される。また天皇御引直衣のときは下に緋袴を召され、蘇芳檜扇を御持ちになる。男子にして緋袴を用ゐるはただ天皇に限る。この他の直衣には小直衣と無襴直衣がある。小直衣はまた、傍續・甘御衣・狩衣直衣などいつて、狩衣に襴（裾の左右に取附けた横幅の帛）の附いたもの、つまり直衣のわ

きが開かれて、袖に袖ぐくりのついたもので、地質色目など狩衣に同じい。無襴直衣は闕腋袍のやうなものである。直衣を著用するのは、直衣の宣旨といふ勅許を得た者に限る。攝家・清華・大臣家は、元服以後老年までみなこの勅許があり、參内にも小儀にも私宅外出にも自由に著ることができた。

狩衣は布衣ともいふ。狩などのとき、立ち働きに便利なやうに出來てゐる爲の名稱で、その形は圓領上頸袖二幅で、袖は前が切れ、背の五寸ばかりの袖附で胴につき、闕腋となり、袖口には袖ぐくりの紐がさされてゐる。狩衣は、もと民間の服であつたが、廷臣は内々の服、散歩服などに用ゐ、別して六位以下や地下は正服として著用し、年齡にはかかはらない。雜色舍人などは、白丁といつて、白布に胡粉をかためた狩衣を著、同じ地の袴をはいた。白丁に對する退紅は桃色の布狩衣で黑袴をはく。これは大臣家の雜色が著たものである。

狩衣を著用するには、烏帽子をかぶり、狩衣・袒・單（後世には小袖を重ねて、袒を省く）を著、狩袴といふ括袴をその下にはき、帶を狩衣の上に正面中央で結び、前を狩衣のひだでかくした。

水干は狩衣の簡易化したやうなものであるが、紫式部の時代からそろそろ用ゐはじめられたらしい。この名が國史に見えるのは、三條天皇の長和二年からである。

直垂の直は直衣の直と同じ意である。垂は、これを打ちかけて著たからの稱で、起りは夜著にある。初めは武士が鎧の下に著たのだが、平安時代の末から下級の者の衣服となつた。紫式部の時代にはまだ普通

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c